

# 「生物基礎」教科書と授業展開を考える

西郷 孝（生物教育研究所，名城大学農学部非常勤講師）

大学の農学部1年生の「生物学」の講義で、多くの学生から「何をどこまで覚えたら良いの?」「問題集を紹介してほしい」と尋ねられる。高校時代にひたすら「暗記」して試験を乗り切ってきた体験から出てくる結果であると考えられる。今年から始まる高等学校学習指導要領（以下、「指導要領」）では、このような状況を改善するために「主体的・対話的な深い学び」が打ち出されている。

当学会や日本生物教育会は、次期指導要領の発表後に「シンポジウム」を全国各地で開催し、その趣旨や変更点などの周知徹底に努めてきた。しかし、そこに参加する教員はごく一部であり、私のこれまでの経験から考えると、新課程で使う教科書の見本本が昨年配布されて、初めて具体的に「が加わった・削除された」などと「新課程」を現実的に認識する教員が圧倒的に多いのではないかと。

新指導要領の「生物基礎」教科書には、ネット上の参照動画や資料へリンクするQRコードが配置されて、「主体的・対話的な深い学び」ができる形になった。かつては、このような参照は教員が探索して、生徒の実態に合わせて授業に取り入れていたものである。今回教科書に加わったことで教員は楽になったと言える。しかし、教員の「創意工夫」の芽を摘むことにもなり、授業の画一化や、さらには「学校の授業よりもネット」という風潮を生む可能性もある。予備校講師による解説動画はその予兆なのかもしれない。教科書のQRコードは一例にすぎず、生徒が自分の興味関心に併せてネット上で探索するように指導すべきだろう。QRコードは使い方を誤ると「諸刃の剣」となりかねない。

現行の指導要領で登場した「発展」「参考」が、今回の教科書でも継承されているが、指導要領を超えた「発展」がやや多い感じがする。「発展」とはいえ「岡崎フラグメント」は基礎と言えるのか?生物学の「基礎」とは何かを考える時期に来ているのではないだろうか。「学習困難校でも項目の多い教科書を採用する」教員が多いようで、「改訂版」では「参考」も含めて各社横並びになる傾向があるのも気にかかる。今回の資料

